園長通信～こころ～ №１４５

分岐点

2024.12.9

人生は、分岐点の連続である。それは、厳しい坂とたやすい坂を選ぶことでもある。前に進んでいく。すぐに二股道にさしかかる。また、ちょっと進んで行くと、再び二股がやってくる。人生とは、分岐点が次々と眼前に迫るものである。

どちらを選ぶか。結果は、その道の選択にかかっている。そこには、人生のコツのようなものがあるように思う。厳しい道を選んだ方が、結局はよい結果を導くことになる。ところが、体力と心の充実が不足しているときであれば、大きな痛手を被ることになってしまう。したがって、そのときの体力と心境の在り方によって道を選ぶべきである。

我が身を振り返ってみる。元々は、小学校の教員だった。最初の学校に３年いた。そこで、最初の分岐点がやってきた。そのまま小学校の教員を続けることはできた。だが、それをしなかった。あえて、厳しい現実が待ち受けている中学校の現場に身を投じた。まだ、体力があった。そのときに、心が充実していたかはわからないが、厳しい坂を選択した。

あのまま小学校の教員を続けていても、それなりの教員人生を歩んでいたように思う。それしか知らなければ、疑問に思うこともない。２校目に、中学校に異動した。３校目には、小学校に戻ろうとは思わなかった。それはなぜか。中学校特有のむずかしさなどに、やりがいを見出していたのかもしれない。国語の授業が、少しはおもしろくなってきていた。部活動も、もっとやりたかった。さほどの迷いもなく、厳しい坂を登り続けることにした。

３校目の坂は、本当に厳しい坂だった。「これはだめか」と思った。それでも、前に進むしかなかった。一筋の光明も見えない。もはや自分の教員魂に頼るしかない。今思えば、いい経験をさせてもらったと言えるが、そのときは、そんなことを考える余裕などなかった。その後の教員人生で、あのときの経験が生かされていると思うと、貴重な経験だったと言える。

その後も、何度も分岐点はやってきた。その度ごとに、常に厳しい坂を選んできた。これは、自分にとっての厳しい坂であって、世の中には、もっともっと厳しい坂を選んでいる人がたくさんいるだろう。人生は、猪突猛進で突き進めばよいというものではない。かといって、いつも決心がつかず、ぐずぐずしてばかりでもよくない。人生は分岐点の連続である。山登りと同じで、厳しい坂、たやすい坂の繰り返しである。それを誰に言われることもなく自分で決め、それを楽しむのである。

もう分岐点はこない。そう思ってはいない。まだまだ二股道が目の前に現れると思っている。そのときに、果たして体力と心の充実があるだろうか。厳しい坂を選ぶ余力が残っているだろうか。自信はない。だが、後悔しないようにはしたい。